

ゴムの語源の栄誉：消しゴムとプリーストリ

昔はゴムのことをカウチューク (caoutchouc) と呼んでいて、これは“涙を流す木”という意味の原住民語から由来したものだそうです。カウチュークがラバー (rubber) と呼び変えられるようになったのは、酸素の発見者として名高いイギリスのジョセフ・プリーストリ (1733年～1804年) が、1770年にゴムが字を消し去る性質 (消字性) をもっていることを発見し、字をこすり取るという意味のラブアウト (rub out) と呼んだことによります。消しゴムはゴムの語源という栄誉を頂くことになりました。

プリーストリは1755年に非国教会派の牧師となり、1761年からはウォリントン (Warrington) の学校で解剖学、天文学、自然科学を教える科学者でもありました。1766年、ロンドンでフランクリンに会うのがきっかけで電気の研究を行い、1767年には“History and present state of electricity”を著して金属表面の放電によって生じる<プリーストリの輪>を説明しました。主に気体の研究に注力し、二酸化炭素を水に溶かしたソーダ水を発明したのをかわきりに、一酸化窒素、二酸化窒素、塩化水素、アンモニア、二酸化硫黄など重要な気体を次々に発見し、1774年には最も有名な酸素の発見にいたり、“気体化学の父”と

称せられています。この酸素の発見は近代化学の扉を開く鍵となったものです。1774年にはパリで化学変化における質量不変の法則を確立したラボアジェにも影響を与えました。フランス革命の動乱の中で、邸宅、図書、実験器具を焼かれて失ったプリーストリは、1794年アメリカに渡ってペンシルヴァニアに定住、静かな余生を送りました。プリーストリが消字性を発見したのは、彼が気体の研究に熱中し酸素を発見する4年前のことです。現在、プリーストリの業績を紹介する書物には、残念ながら、“ゴムの消字性の発見”について見いだすことができませんでした。

プリーストリがゴムの消字性を発見してまもなく、消しゴムはロンドンで商品化され、ついでフランスに渡り1775年の初め頃にはパリの文房具店の店先に立方体の消しゴムが見られるようになったそうです。ゴム製品の中で最も歴史と伝統を誇る消しゴムの誕生です。我が国で最初に消しゴムが作られるようになったのは明治の中期ですが、製法が難しくなかなかうまくいきませんでした。輸入品に負けないほどのものが作れるようになったのは昭和の初期の頃からでした。